

みんなで支えあう社会と税

神戸市立鷹匠中学校3年 高桑 里紗

私の祖父は緑内障という病気を患っている。緑内障は、視野が徐々に欠けていく病気で、最悪の場合失明してしまうこともある。今、祖父は失明こそしていないが、新聞などの文字はもう見るができない。そのため、日々の生活に支障が出ることもたびたびある。緑内障は進行性の病気なので祖父は検査のために三ヶ月に一回、定期的に病院へ通っている。ある日、検査と一緒についていったときのことである。会計を待っている間、祖父が医療費の負担のことについて話してくれた。

現在、祖父は七五歳だが、普通七五歳以上の高齢者であれば、かかった医療費の一割だけを窓口で負担することになるそうだ。ただ、祖父は緑内障で障がい者手帳をもっているため、一割全てを支払う必要はなく、一回の通院あたり六百円までの支払いでいいそうで、さらに三回目以降は支払う必要もないということだった。これは、重度障がい者医療費助成事業といわれるもので、障がい者手帳の一級と二級を持っている人などに適用されるそうだ。本人が窓口で支払った残りは、税金で賄われているということで、窓口での支払いが安く抑えられて助かると祖父は言っていた。

障がいをもっている方はどうしても治療や検査などで病院を受診する機会が多くなり、医療費の支払いが増えてしまうと思う。そのため、重度障がい者医療費助成事業があれば、そうしたことで困っている人はとても助かるのではないかと感じた。また、調べたところ国民の医療費に対して、年間一人当たり約十三万四百円の税金が使われているそうで、医療費が高いため気軽に病院に行けない国もある中で、日本は税金による負担があるおかげで安心して病院に通える国なんだと思った。

こうして考えると、税金は、困っている人を社会全体で助けるために使われることになる非常に大切なものでもあると思う。今、世界中で蔓延するコロナウイルスの影響で、ここ日本でも収入が減少したりと困っている人がたくさん出てきているそうだ。そうした人たちのために特別定額給付金や休業支援金など様々な種類の給付金の制度が税金をもとにして作られている。一方で、税金を納められない人のために納付を猶予する制度もある。

私たちは、今は健康でもいつ何時、病気や怪我で病院に通うことになるか分からない。世界的な感染症などの影響で困った状況に置かれてしまう可能性も十分にある。そんなときに税金によって作られた制度や事業が、自分とは面識がなくても困っている人を助けることになるんだと分かった。税金を納めることで、社会全体で困ったときに助け合うことができる制度が作られ、毎日安心して暮らせる社会が築かれていくんだと思った。私がこれから納めていく税金が、遠くにいるため、直接手助けをすることが難しい困っている人を助けることにも繋がっていくと分かり、とても誇らしい気持ちになった。